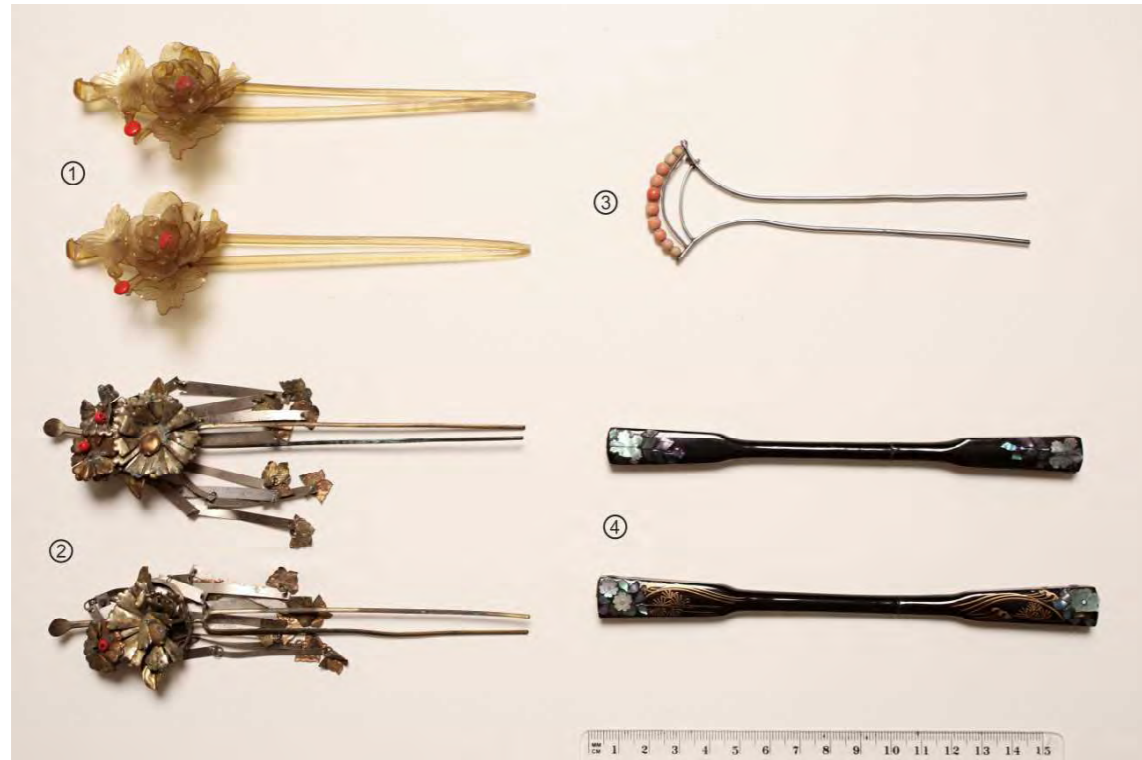


No. 163 民俗 簪・笄

簪は女性の髪飾りです。語源は髪挿しで、これは祭りや行事の時に髪に挿す草花や、男性が被る冠を留めるピンなど、髪に挿すもの一般を指す言葉でした。簪が女性の髪飾りを指すようになったのは江戸時代中頃からです。かつて女性の髪は、黒くてまっすぐなまが美しいとされ、日常で髪飾りをつけることはほとんどありませんでした。江戸時代中頃になると、女性は髪を様々な形に結い上げるようになり、髪留めや髪飾りとして簪を日常的に用いるようになりました。簪はやがて「女心の数だけある」といわれるほど、様々なものが作られるようになりました。

笄も女性の髪飾りですが、もともとは髪搔きという、髪をかきあげたり、痒いところを搔いたりするための棒で、男女ともに使う実用品でした。それが簪と同様、江戸時代中頃から女性の髪飾りとして用いられるようになり、両端をふくらませ装飾を施したものや、中挿しとよばれる二つに分かれる形のものが作られるようになりました。

写真の簪と笄は、宇城市三角町の美容師が、昭和時代に使っていた髪結い道具の中のひとつです。婚礼などで日本髪を結った方に貸し出していたのでしょうか。明治時代になると、西洋の髪形を真似た束髪が徐々に広まり、昭和10年代には熊本県内でも正装やよそ行き以外で日本髪を結う人は少なくなりました。こうして、日常で簪や笄を使うことは減っていきました。(迫田久美子)



①花簪 ②びらびら簪 ③束髪用簪 ④笄



熊本県 松橋収蔵庫

HPアドレス http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524 熊本県宇城市松橋町豊福1695 TEL 0964-34-3301 FAX 0964-34-3302

メールアドレス shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

編集・発行 熊本県松橋収蔵庫 宇城市松橋町豊福1695 TEL 0964-34-3301 2015年3月15日

熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより

No.31 VOL. 8-4

平成26年度 第6回企画展示

フィールドサインを見つけにいこう

家の周りや山の中を歩いていて、動物の足あとや糞、食べかけの果物などを見つけたことはありませんか？

そのような、生き物たちが残していった生活の痕跡のことをフィールドサインといいます。

フィールドサインを観察すると、どんな生き物が、そこで何をしていたのかが見えてきます。

今回の展示では、身近な里山で見つかるフィールドサインと、それを残した生き物の標本を合わせて紹介していきます。ぜひお越し下さい。



雪の上に残された哺乳類の足跡 菊池市鞍岳 2015年1月4日

会期：平成27年3月20日(火)～6月21日(日) 時間：3月 午前10時～午後5時 4月～ 午前9時～午後5時 休館日：3月中は日曜日・祝日休館 4月以降は月曜休館 (ただし5月4日は開館、5月7日は休館) 入館料：無料

松橋収蔵庫の名称と開館日が変更になります

4月1日より、松橋収蔵庫は、県内の博物館、資料館、市町村等が連携して活動するための「熊本県博物館ネットワークセンター」となり、所蔵資料を用いた地域での展示会、地域での自然や文化に関する学習会や観察会など、県内どこに住んでいても博物館活動に参加できることを目指す「熊本県総合博物館ネットワーク」の中核施設として再スタートします。これに伴い、休館日が日曜日から月曜日に、開館時間が午前9時に変更されます。5月中旬には、講座やフィールドミュージアムの案内も各公民館等に配布する予定です。職員一同再スタートに向け張り切っています。気楽に利用してもらえると幸いです。



長洲町「金魚の館」での展示

熊本県では「熊本県総合博物館ネットワーク」の構築に取り組んでいます

私たちの住む熊本は、素晴らしい自然や文化遺産に恵まれています。

この宝を次世代に継承していくため、熊本県では県内の博物館、資料館、市町村等が連携して、県民の皆さんの身近な地域で様々な博物館活動を実施する「熊本県総合博物館ネットワーク」の構築を進めています。

No. 159 動物 ニホンジカ (*Cervus nippon* シカ科) の頭骨

ニホンジカは日本各地の森林や草地に広く生息する草食動物です。写真1は2006年3月に上益城郡山都町内大臣にて採集した雌のニホンジカの頭骨です。

今回はニホンジカの角を紹介しましたが、今回は歯に注目してみましょう。哺乳類の歯は大きく分けて切歯、犬歯、臼歯の3つがあります。草食動物の歯は、草をすりつぶすための臼歯が大きく発達し、逆に犬歯は退化しています。切歯は食べ物をかみちぎるのに使う歯で、この歯にニホンジカの食べ方の特徴が大きくあらわれます。

多くの哺乳類はあごの上下ともに切歯がありますが、ニホンジカを含むウシの仲間の切歯は下あごにしかありません。したがって、植物を食べるときは、下あごの切歯と硬い上唇の内側で植物を挟んで引きちぎります。

また、ニホンジカは草や葉のような柔らかいものだけでなく樹皮も食べます。写真2の切歯(番号1~3)のうち、中央寄りの歯(番号1)は先がヘラのように大きく広がっています。ニホンジカはそのヘラのような切歯を使って、樹皮をそぎ取って食べます。このように、歯にはその動物がどんなものをどうやって食べているのかがあらわれます。(小原舞)



写真1



写真2: 切歯(左下あご)の拡大写真

No. 160 歴史 大工雛形秘伝書図解 (熊本市本田家資料)

日本の建築技術は秘伝として伝えられるものですが、江戸時代以降、建築の基礎である規矩術(設計技法)や木割(部材の寸法の割合)などを図解した、建築設計の手引となる雛形本が木版刷りで一般に出版されるようになり、広く知られていきました。

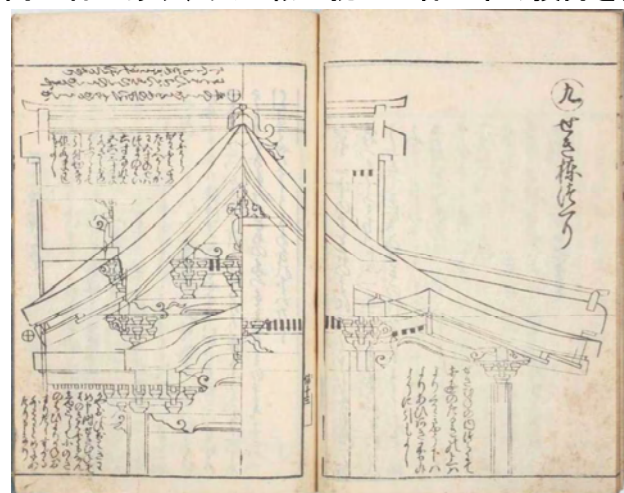
その雛形本の一つである『大工雛形秘伝書図解』は、享保12年(1727)に出版されたものです。巻末の刊記には、図師として京都柳田組大工の西村権右衛門の名があり、大工職に就いた者が早く技術を修得できるよう作成したことが

記されています。乾・坤の1巻2冊からなり、社寺の建築物について、乾には軒の規矩、坤には門や拝殿や堂などの木割が図と説明文で解説されています。

本資料は、現在の熊本市南区南高江の宮大工及び仏具師であった家に伝わったものです。「高江村大工」と書き入れがあり、大工仕事の参考とするため所持されていたものであったことが窺い知れます。このような書物や経験で得た技術によって地域の木工仕事を担っていた職人の姿が想像できます。(松本晃世)



表紙



本文「せき棟づくり」

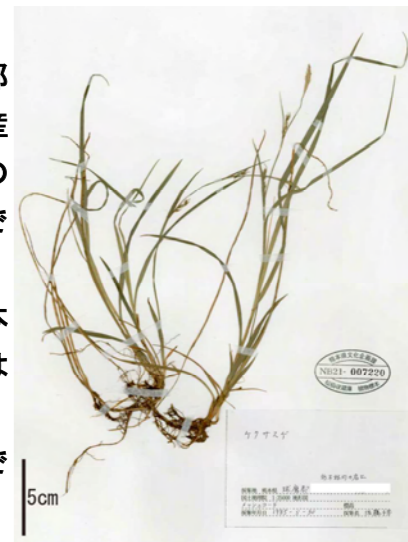
No. 161 植物 ケヒエスゲ (*Carex mayebarana* カヤツリグサ科)

カヤツリグサ科のスゲ属 *Carex* は、世界に約2000種、日本には250種ほどが分布しており、それらは湿地や草地、森林などのさまざまな環境に生育しています。ケヒエスゲは、山地の林内に生育するスゲ属の一種で、別名ケクススゲとも呼ばれます。四国の一部と九州の中部以南だけに分布する日本固有の種であり、熊本県における分布も非常に限られることや、ニホンジカの食害によると思われる生育環境の悪化などの理由から、「熊本県の保護上重要な野生動植物—レッドリストくまもと2014—」では絶滅危惧IA類(CR)に選定されています。

ケヒエスゲは、前原勤次郎が昭和3(1928)年5月20日に球磨郡で発見したことに基づいて新種記載され、熊本県の生育地は模式産地とされました。前原勤次郎は、球磨郡内で教職に就きつつ植物の研究を行い、昭和6(1931)年に「南肥植物誌」を出版した人物です。学名の“mayebarana”は、前原勤次郎を記念したものです。

写真の標本は1985年に球磨郡内で採集されたものです。この標本によって、希少なケヒエスゲの生育だけでなく、1985年の採集地はケヒエスゲが生育できる環境であったことを示しています。

植物標本は、植物そのものの情報だけでなく、その植物が生育できる環境がそこにあったという自然環境の情報も含んでいます。(前田哲弥)



ケヒエスゲの標本

No. 162 地学 球顆玻璃斑岩

阿蘇郡小国町西部の山甲川両岸の台地には、二酸化珪素の成分が多い火山噴出物よりなる山甲川流紋岩類が分布しています。山甲川流紋岩類の多くは灰白色で鉱物が一定方向に並んでいる構造を示す岩石ですが、写真1のような岩石も見られます。

この岩石は、多数の小さな球体が集まってできています。この小さな球体は球顆と呼ばれ、二酸化珪素を多く含むガラスや火山岩中に見られます。この岩石の球顆の中は、断面を見ると、長石や石英の結晶が放射状に集まってできており、球顆の表面は微細な結晶でできた層で覆われています。球顆の直径は約5mmで、球顆と球顆の隙間は、ガラス質の黒曜岩(写真2の黒い部分)で埋められています。ガラス質の物質で鉱物の隙間を埋めている火山岩を玻璃斑岩といい、球顆状の鉱物があるので球顆玻璃斑岩と呼びます。この岩石も、流紋岩の一種です。

火山岩は、同じ溶岩でも、冷え固まる時の条件によって岩石の見え目が全く異なってきます。山甲川流域の河原では、灰白色の流紋岩以外にも、球顆玻璃斑岩をはじめ様々な見目の流紋岩が観察できます。(廣田志乃)



写真1



写真2 実体顕微鏡で撮った写真